様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	学校臨床実践コース ／末内　佳代

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され，教員の研究費配分も厳しくなってきており，教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで，科研費申請に向けて，あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1．目標・計画

1）テーマ：教職大学院における特別支援教育―ものと場と人をつなぐ心と学習の支援―

2）計画：①通常学級における特別支援教育：特別支援教育の視点を活かしたした生徒指導プログラム
②通常学級における特別支援教育：特別支援教育の視点を活かした指導方法
教職大学院の特性を活かし、実習校との連携による研究を展開する。

2．点検・評価

1）科研申請という形にはならなかったが、それに向けての実践を積むことができたと思う。来年度は科研申請に前向きに取り組みたい。

2）①論文は『日本教育大学協会研究年報』第３１集に投稿し、採択された。②徳島市「学校元気アップ推進事業」において市内小学校4校で13回、教職大学院実習校において3回、計16回の事例検討会をもち、現場の教師と共に心と学習の支援を行った。教職大学院の特性を活かし、
実習校との連携による研究を展開するという計画は、概ね達成できたと思われる。

Ⅰ－2．大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で，あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか，具体的に示してほしい。

1．目標・計画

1）学生の実践の成果物として、視覚と心に訴えた、「わかりやすい情報で理解しやすいパンフレット」で広報活動を実施する。

23年度の学生・学校・市教委との協働により2件の実習成果パンフレット作成した。
入試説明会及び教育委員会・学校訪問等で広報することにより、教職大学院の学びの実際を理解してもらい、
教職大学院入学希望者が増加することを目指す。

2）修了生の実習校へのフォローアップを行う。

修了生の実習校から、継続して支援に関わってほしいという要請を受けている。学校と大学との協働を継続する ことにより、 点・線・面と広がる人とのつながりによって教職大学院入学希望者が増加することを目指す。

2．点検・評価

1）講演先では、作成に携わった教職大学院のパンフレットを配布し、広報活動に努めた。現場の教員からは「パンフレットを読んで教職大学院に興味をもった」という声が聞かれた。

2）鈴鹿市教委、徳島市教委との連携活動において、また、修了生並びに在籍する教職大学院生の実習校先でも本学教職大学院の学びを広報した。顔の見える広報を今後も継続したいと思う。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

1）RPDCAサイクルを活かした教育支援を実施する。
C（評価）は可能性を見つけるための元気の出る評価であり、その結果、学生が主体性をもって課題研究に取り組める教育プログラムを授業や実習指導の中に展開する。

2）教員と学生の信頼関係を構築する。
週1回のゼミ指導、月1回のランチミーティング、年2回のコース研修旅行等で、信頼関係を深めると共に学生が、教員としての自分を見つめなおし、自らが自らの答えを求め、さらこれからの教育活動に活かすことができる学生生活支援を行う。

1）と2）のバランスのとれた支援によって、学校臨床実践コースの教員として学生の知と心の成長を見守りたい。

2．点検・評価

1）6人のゼミ生の指導教員として、RPDCAサイクルによる実習指導を通して学生の主体的な学びを支援することができた。実習校に訪問し、実習校の課題と学生のニーズが一本化された実習課題を設定することに努めた。

2）学生に対して、週に1回、1年次は合同で2年次は個別にスーパーヴィジョンを実施した。年度目標にある「信頼関係を深めると共に、学生が教員としての自分を見つめ直し、自らの答えを求め、これからの教育活動に活かすことのできる生活支援」は概ね達成できたと思われる。
また、修了生への指導助言も行った。平成24年度日本教職大学院協会シンポジウムにおいて3期修了生が、学修成果を発表し，高い評価を得た。

Ⅱ－2．研究

1．目標・計画

1）研究テーマ：教職大学院における特別支援教育―ものと場と人をつなぐ心と学習の支援―に関する研究を論文にまとめる。

2．点検・評価

1）これまでの実践を論文（共著3）にまとめる、ことができた。
①ユニバーサルデザインを活用した基本的生活習慣の育成―児童と教職員による生徒指導RPDCAサイクルの実践―：日本教育大学協会研究年報』第31集　②大学・教育員会・学校と連携した教育改善に関する実践研究（Ⅰ）：鳴門教育大学学校教育研究紀要2012
③大学・教育員会・学校と連携した教育改善に関する実践研究（Ⅱ）―鈴鹿市中学校における生徒質問紙調査結果より―：鳴門教育大学学校教育研究紀要2012

2）日本LD学会第21回大会にて連名でポスター発表を行った。

Ⅱ－3．大学運営

1．目標・計画

1）コラボレーションオフィス・コーディネーターとして、教職大学院の学生が教育成果を上げるための環境整備に努め、職務を遂行する。

2）大学からの要請があれば、主体的に取り組み、職務を遂行する。

2．点検・評価

1）コラボレーションオフィス・コーディネーターP1担当として、学生の教育・学生生活支援を行い、職務を遂行できたと考える。教職大学院の教員としてこれからも、学生や学校現場のニーズを把握し、授業改善に努め、大学運営の一助となるよう取り組んでいきたい。

Ⅱ－4．附属学校・社会との連携，国際交流等

1．目標・計画

1）三重県鈴鹿市立鈴峰中学校、徳島県吉野川市立飯尾敷地小学校、徳島県板野郡板野東小学校、
　徳島県牟岐町立牟岐小学校との連携による教育研究活動
2）教育支援講師登録
3）鳴門教育大学心理・教育相談室相談員

　等により社会との連携に努める。

2．点検・評価

下記の活動を行い、附属学校・社会との連携に努めた。
1）三重県鈴鹿市立鈴峰中学校、三重県鈴鹿市立天栄中学校、徳島県吉野川市立飯尾敷地小学校、徳島県板野郡板野東小学校、 徳島県牟岐町立牟岐小学校との連携による教育研究活動
2）教育支援講師として①徳島県立脇町高等学校②兵庫県立洲本高等学校③阿南市立富岡小学校④徳島県立海部高等学校での授業と講演
3）鳴門教育大学心理・教育相談室相談員
4）公開講座講師・教員免許状更新講習講師
5）徳島県教育委員会スクールプロフェッサー
6）徳島市不登校対問題対策検討委員
7）鳴門教育大学附属特別支援学校第44回研究発表会中学部分科会及び授業研究会での指導助言

Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）

1）平成24年度徳島市教委との連携活動「徳島市学校支援専門家チーム活用事業」の教職大学院側担当として活動した。初年度8月からの事業ではあったが、対象である徳島市の小学校31校中13校、市教委指定の中学校1校から講師依頼があり、」派遣回数39回の成果を上げた。
　本事業は平成25年度に向けて教職大学院の教員17名が登録済みである。対象校も小学校から小中学校に拡大する。教育委員会や大学をはじめとする関係機関や地域社会との組織的・継続的な連携・協働のしくみづくり」の一つである本事業が継続されるように今後も担当として努力したい。